

人間分子の挙動一棲み分け

“三島先生は夭折の美学を説いておられましたが、随分長生きされました（三島由紀夫/学生との対話）^[1]”

人間分子は、それぞれが、生物相と文明相の2重生活を送っています。生物相は、血縁を基本として単元的です。人間分子が帰属する生物相は、生まれ落ちた初期条件によって決まり、解消不可能です。生みの親と育ての親、というように生き立ちによっては2つ以上の生物相に帰属する場合がありますが、そのようなケースは稀です。男女の結婚は、文明相としての関係性から、生物相としての関係性への後天的な移行と言えます。離婚はどうでしょうか。子供をもうけない場合は、生物相としての二人の関係性を完全に破棄することができます、子供をもうけた場合、親子という縦の関係だけでなく、離婚した男女間にも子供を介した横の血縁関係が成立するため、もはや生物相としての二人の関係性を破棄することはできません。人間分子は、生物相の血縁樹形図の中に、否応なしに一義的に位置づけられるのです。そのような意味で、人間分子は、生物相として原則的には1つの顔しか持つことができません。一方、人間分子が帰属する文明相は多元的です。会社、団体、学校、サークル、等々、人間分子の選好によって、その気になれば、いくらでも所属可能であり、いくらでも解消可能です。人間分子は、文明相において、それぞれの所属組織に対応した社会的な顔をいくつも持つことになります。

年齢によっても、2つの相に対する帰属の重みは変化してくるでしょう。生まれたての赤ん坊は、生物相としての顔しか持ちません。それが、保育園、幼稚園、小学校、習い事、と年齢と共に少しずつ、文明相の顔を増やしていくことになります。親の保護下にある未成年たちは、前頭葉が発展途上にあるため、人間特有の4次元自己客観視能力を完全には発現することができず、生物相と文明相の区別がつきません。その結果、学校などでいじめにあって自己否定されてしまうと、生物相としての自己を否定されてしまったと勘違いして、最悪の場合、自殺に走るのです。よくよく考えてみれば、文明相としての顔など、生成・消滅が可能なのです。学校が世界の全てと思いがちですが、代替可能な世界は他にいくらでもあることを忘れてはなりません（注1）。就職すると、文明相としての顔が生物相としての顔を圧倒してきます。結婚して子供が生まれた場合は、これに生物相としての新たな顔が付加してきます。30代~50代は、肉体的・精神的に充実した年齢帯であることと呼応するように、文明相における仕事、生物相における子育て、この両面において、責任が重くのしかかり、極めて多忙となりがちです。多くの幸福度アンケート調査の結果、横軸年齢、縦軸幸福度とすると、幸福度は年齢と共にV字型を示すことが知られており、この年齢層は、まさに幸福度の最も低いV字の底にあたります。これは、生物相・文明相の両面における多忙さによって、自分自身に振り向ける時間や自由が、著しく不足することと無縁ではないでしょう。退職すると、仕事人としての文明相の顔を失い、生物相としての顔を取り戻していきます。幸福度は、年齢と共に文字通りV字回復していく。退職すると、自由になった時間を投資して、これまで行けなかった旅行に出たり、就職する前の若い頃に夢中になっていた趣味やスポーツに戻っていったりする人も多いことでしょう。我々は、生物相としての顔を取り戻すと、

いろいろな点で幼児戻りしていくようです。その一方で、仕事から解放されて手にした自由時間を持って余し、鬱々とする人も少なくありません。時間を持って余していた幼児期は、見るもの触れるものが新しく、新鮮な驚きに満ちていたものが、老年期には、社会相や文明相の仕組みがすっかり判ってしまい、幼児期のような感受性も薄れ、膨大な自由時間だけが手元に残るのです。完全な自由というのは、逆に不自由なものです。過去、多くの人によって、退屈・怠惰が真面目に考察されてきたのは、そのためでしょう。持て余した時間による鬱を解放してくれるのは、適度な多忙です。時に、多忙は、最良の精神安定剤になるのです。

このように、年齢によって差はあるものの、人間分子は、2つの相を同時並行的に生きなければなりません。これから、人生100年時代に突入すると、文明相における仕事人としての顔1つでは事が足りず、第2キャリア(50~60代)、第3キャリア(70代~80代)によって、文明相としての顔を持ち続けないと、100歳までの豊かな老後を送れないのではないかと懸念されています。人間分子は、2つの相をどのように棲み分けていくべきでしょうか。生物相を縦軸に、文明相を縦軸にとると、2つの相のバランスを示す4象限チャートが出来上がります(図14)。第1象限は、生物相もOK、社会相もOKで、ワーク・ライフバランスの取れた生き方といえるでしょう。趣味(生物相)と仕事(文明相)がほぼ一致している人、学者、芸術家、小説家、などに多いようです。また、農家、猟師、個人商店、など、家族(生物相)で経営する(文明相)職業の人に多いのも特徴です。第2象限は、生物相OK、社会相NGで、趣味(生物相)を生きがいとするために、仕事(文明相)は、それを維持するための手段、と割り切る生き方です。第3象限は、生物相NG、文明相OKで、文明相における自己実現あるいは仕事の完成のために、生物相の全てを肥やしとして、自分の人生を献上してしまう生き方です。私生活と言えるものを持たなかった(あるいは私生活を文明相の劇場と化した)マイケルジャクソンのようなスーパースター、滅びの美学・夭折の美学の完成のために割腹自殺した三島由紀夫、あるいは日本の高度成長期、「24時間戦えますか?」とばかりに、会社に全てを捧げ、家庭を顧みなかった企業戦士、などが当てはまるでしょう。第4象限は、生物相NG、社会相NGで、極めて稀な生き方です。世捨て人、仙人、厳格な出家僧、などが挙げられます。これらは、自然に準じて生きているのだから生物相OKではないかと思われるかもしれませんが、SEXや妻帯を禁忌としている点で、生物としてのヒトを逸脱していると言わざるを得ません。文字通り、人間業ではない境地です。これらの4象限の生き方の、どれが良いとか悪いとかを、議論するつもりはありません。いずれの象限の生き方でも、幸せの内的要因(3-3節)を発動することによって、個人的には、精神充足を追求することは可能であると考えます。ただ、家族を形成する夫婦間となると、話はまた別です。夫婦両方が、同じ象限に属していることが望ましいですが、違う象限に属している場合でも、お互いの生き方(象限)を十分に承認することができないと、問題となるでしょう。

さて、上記のような職業的な大きな生き方とは別に、衣・食・住、などの日常のライフスタイルの中でも、自然(生物相)と人工(文明相)のいずれの手段を選択するか、バランスが求められます。通勤を例に取りましょう。片道10kmの通勤路に、メトロを使用するか、自転車を使用するか、徒歩を使用するか。文明の利点は、人間に時間的余剰=利便性を与えることです。文明の欠点は、その脆弱性にあります。3つの交通手段で、文明度が高いのはメトロです。最も早く目的地に達し、時間節約になります。その反面、天災による停電・線路遮断などにより、人工的循

環システムはあっけなく停止します。満員電車のストレスも不利です。徒歩は、最も時間がかかり、我々から時間的余剰を奪いますが、天災などのリスクに対して最も堅牢です。また、健康増進にも有利です。自転車は、徒歩のもつ有利・不利を両方弱めた格好で、2つの手段の中間に位置します。3つのうち、どの手段が優れているかは、人間分子の生活条件や、その他の付帯条件にも左右されるので、一概には言えません。しかし、人間分子は、盲目的に、漫然と、メトロに乗るのではなく、一度は自分の置かれた状況下で、最も精神充足を与える自分に適した手段であるか、真剣に考えていただきたいものです。本当に朝の1分が律速なほど忙しい人や、通勤路における車の往来が激しく自転車には適さない人などは、メトロを選ぶかもしれません。その一方で、通勤時間に匹敵するだけの時間を、スポーツジムのルームランナーに費やしているのは、滑稽とも言えます。メトロを利用するなら、敢えて座らないことにより、ささやかな健康増進を図り、また、移動時間に読書するなどして、さらなる時間の有効利用を図れるかもしれません。それほど、朝の時間が律速でない人は、自転車を選ぶかも知れません。通勤路には、大きな河川のサイクリング道路もあり、商店街を眺めながら、行くのも悪くないでしょう。メトロより時間はかかりますが、満員電車のストレスを思えば、季節で変わる河川敷の花は癒しであり、一輪頂いて、オフィスの机に飾るのも悪くないでしょう。

(注1) 安易に学校を変えることを推奨してはなりません。子供も、幸せの内的要因を発揮して、大きな渦の流れに乗って、一步一步、精神充足に向かう努力をすべきでしょう。その上で、いざとなったら、1つの文明相の世界など、丸ごと捨て去ることが可能なのだと、という意識は、どれだけ我々の心を軽くしてくれるでしょうか。

参考文献

[1] 三島由紀夫、三島由紀夫/学生との対話 (CD)、新潮社

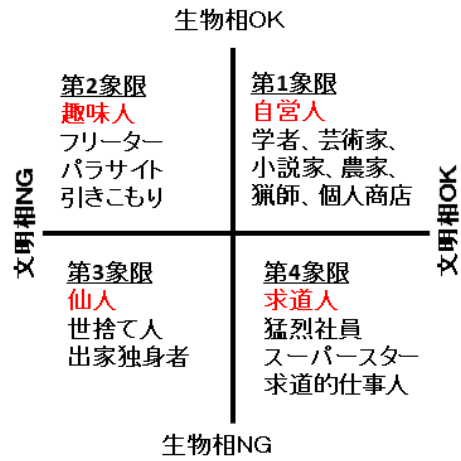


図14 生物相と文明相のバランス

図中の職業は、4象限それぞれにおける典型的な例示に過ぎず、例えば、学者が必ずしも自営人(第1象限)であるとは限らない